

人格的構造と政党および職業に対する 態度との関係について*

熊本大学

葛谷 隆 正**

I 問題と仮説

1950年に, Adorno, T. W. ら⁽¹⁾がかの有名な「The Authoritarian Personality」を公表して以来, 人格的構造と人種的偏見との関係に関する研究が心理学者達のひとつの興味を中心となつてきている。特に Adornoら⁽¹⁾は F-scale (the Fascism scale) によつて測定される権威主義 (authoritarianism) と E-scale (the Ethnocentrism scale) によつて測定される人種中心主義 (ethnocentrism) との間には0.75の相関があることを見出し, 人種的偏見は権威主義的人格の一表現であると考えた。Levinsonと Huffman⁽²⁾はTFI scale (the Traditional Family Ideology scale) を考案して, 権威主義的人格と専制的家庭観との密接な関係を明らかにした。

さて, 人種中心主義ないし偏見的人格とは自国びいきで外国人嫌い (pro-ingroup and anti-outgroup preference) の人間をいうのであるが, これとは正反対の方向の人間, つまり自国民嫌いで外国人びいき (anti-ingroup and pro-outgroup preference) の人間がいる。このような人格構造を Perlmutter⁽³⁾は xenophilic personality と呼び, authoritarian personality との関係を研究して両者の間に基本的に類似した人格性特質のあることを報告した。

人種的偏見を上述した the authoritarian personality theoryとは異なつた角度から研究した心理学者もあつたが, その代表者に Sherif⁽⁴⁾がいる。かれの理論はいわゆる the reference group theory といわれるもので, 外集団に対する行動基準はその外集団との間の関係がうまくいつているか, いないかによつて基本的には決定されるとするもので, 偏見は外集団との相互の利害関係の衝

突から起こると考えるのである。換言すれば, Xenophobia であるか Xenophile であるかを考察するに当たつては, 相手集団との機能関係いかんがまず考慮されなくてはならぬと主張するのである。

筆者はこれらの所論に刺激されて, 権威主義的人格と政党および特定の職業に対する社会的態度との関係を明らかにしようと意図した。この研究に当たつて, 次の2つの仮説が立てられた。すなわち,

1 権威主義尺度で高い点を取る学生は低い点を取る学生よりも, 有意的に保守政党をより多く支持するであろう。

2 権威主義尺度で高い点を取る学生は低い点を取る学生よりも, 有意的に権威的職業に対する名声評価において, より高く評価するであろう。反対に非権威的職業に対してはより低く評価するであろう。

II 研究手続き

(1) 被験者 熊本大学教育学部1年次の男子学生 (EM) 119名, 同女子学生 (EF) 53名, 同じく工学部男子学生 (TE) 88名計260名である。その年齢分布状況は Table 1 のとおりである。実験年月は1960年6月22日~25日の間であつた。

Table 1 被験者数とその年齢別分布状況

	N	17才	18	19	20	21	22	23	不明	平均 年齢
EM	119	1	55	45	13	4	1	0	0	18.72
TE	88	0	33	28	20	3	1	1	2	19.00
EF	53	0	46	6	1	0	0	0	0	18.15
T	260	1	134	79	34	7	2	1	2	18.70

(2) 実験方法と採点法

別紙のような質問紙を配布し, 特に純粹に心理学的な調査であるから, 卒直にかつ全項目に答えてほしいむねを強調した。質問紙の〔I〕は権威主義尺度として, Adornoら⁽¹⁾が権威主義的な人格性特質を測定するため

* The relationship of authoritarianism to political and occupational attitudes.

** by Takamasa Kuzutani (Kumamoto University)

質 問 紙

年齢 _____ 性別 (男・女)

〔I〕 次に10の意見があります。それぞれの意見について、賛成か反対かを、次の要領に従つて、末尾の括弧内に番号で示して下さい。

非常に賛成……7, かなり賛成……6, 大体賛成……5, 何とも言えない……4,
 大体反対……3, かなり反対……2, 非常に反対……1

- (1) 人間性はどうかであろうとも、戦争や争いは永久になくならない。()
- (2) 子供が学ぶべき最も重要なことは、権威者に素直に服従するということである。()
- (3) 国をより幸福にするには、法律や話し合いよりも、少数の強力な指導者が必要である。()
- (4) 婦人は社会問題や政治問題から手を引くべきである。()
- (5) 人は名誉を傷つけられたら、その侮辱を決して忘れてはならない。()
- (6) 親に対し、愛情、感謝、尊敬を感じない者は、人間の屑である。()
- (7) 若い者は反抗的であることをやめて、自分のなすべき仕事に専念すべきである。()
- (8) 人間は強者と弱者の二つのグループにはつきり分けることができる。()
- (9) 自分では正しくないことだと思つても、目上の人の言うことやすることだまつてついていくのがよい。()
- (10) いろいろな社会不安があるが、それは不道德な人々を一掃することによつて解決できる。()

〔II〕 あなたは現在、次の政党の中、どれを支持しますか、適当なものに○印をつけて下さい。

自由民主党 社会党 民主社会党 共産党 その他 () 支持しうるものなし

〔III〕 世間では、いろいろな職業に対し、あれは望ましいとか、望ましくないとかと言つて、社会的名声(評判)に高下をつけているようですが、今その高下を次のように分けたら、以下の各職業はどれに当るかを、番号で示して下さい。あまり深く考えないで、頭に浮んできたものでよろしいのです。

最も高い……9, 非常に高い……8, かなり高い……7, やや高い……6, ふつう……5
 やや低い……4, かなり低い……3, 非常に低い……2, 最も低い……1

職業名	番号	職業名	番号	職業名	番号	職業名	番号	職業名	番号
バスの運転手		ホテルの支配人		竹細工職		栄養士		市役所の吏員	
俳優		スチュアーデス		理髪師		弁護士		画家	
露天商人		溶接工		建具師		デパート店員		自動車組立工	
製靴工		寝台車のボーイ		電気技術者		教育委員		警官	
工場主		炭やき		小説家		車掌		大学教授	
きこり		郵便配達夫		漁師		会社・官庁の課長		紡績工	
靴みがき		国務大臣		プロ野球選手		小売商店主		新聞記者	
町村長		日雇労働者		裁判官		鉄道職員		質屋	
社員		銀行・会社の重役		女給		県知事		医師	
守衛		卸売商店主		旋盤工		電話交換手		労働組合委員長	
ファッション・モデル		土地仲買人		船長		行商人		デザイナー	
自作農		建築技師		外交官		印刷工		仲仕	
歌手		看護婦		保険勧誘員		自衛隊員		タイピスト	
道路工		大工		ちり運搬夫		国会議員		炭坑夫	
旅館のコック		小学校教師		寺の住職		パン製造工		製材工	
製鉄工		飛行機操縦士		小作農		会計士			

に考案した the F-scale を少し修正し簡略化したものである。10項目の全部に反応したものを有効とし、7点尺度で採点する。したがって可能な成績範囲は10点~70点で、理論的平均値は40点である。

質問紙の〔Ⅲ〕は職業の社会的名声尺度として用いられ、79種の職業の全部に反応したものを有効とし、9点尺度で採点する。したがって各職業の社会的名声点の可能な範囲は1点~9点であり、理論的平均値は5点である。

Ⅲ 結果とその考察

1 各調査項目の全体的結果

(1) 権威主義点の状況

応答結果の有効なものについて各グループごとに権威主義点の状況をまとめてみると、Table 2 のようになる。理論的平均値は40点であるのに、本研究における被験者の全平均値はわずかに29.18であり、最も高いEM Group の平均値でさえ、30.16に過ぎず、最も低いFF Group のそれは実に27.72という低い値であるのには驚いた。個別的に権威主義点を調べてみると、理論的平均

Table 2 権威主義点

	EM	TE	EF	T
N	112	84	50	246
M	30.16	28.75	27.72	29.18
SD	6.90	5.79	4.69	6.20
t	t = 1.51		t = 1.26	
P	0.20 > p > 0.10		0.30 > p > 0.20	
	t = 2.26		0.05 > p > 0.02	
	理論的平均値.....40.00			

値以上の成績をとっているものは全被験者のわずか6.6% (13名) に過ぎない。このような状況でははたして、本研究の研究意図が達成されるだろうか、強い危惧の念を抱かされたのである。たとえばこれを Diab, L. N. (5) がアラブのアメリカ大学留学生について研究したものに比べると、後者では1項目の値が3.02~6.00の範囲にあり、その平均値は実に4.76という高さである。この成績はかれ自身も述べているように、アメリカで得られた最高平均値よりも高いものであるが、その原因をアラブの家庭や社会の著しい権威主義的文化に求めている。われわれの結果は戦前の日本文化がきわめて権威主義的であったことを思えば、戦後の民主教育や社会・国家の民主化は今日再び逆行しつつあるのではないかと人々を憂えしめているにしても、その効果に顕著なものがある

ことを立証しているといつてもよいのではなかろうか。

次に、仮説の検討のために、被験者の約1/4ずつを上位および下位より選び、上下両極群を作った。各グループごとの上下両極群の平均権威主義点は Table 3 のようであり、両群間には明白な有意差が各グループにおいて観察された。

Table 3 上下両極群の権威主義点の比較

	EM		TE		EF	
	下位群 (L)	上位群 (H)	下位群 (L)	上位群 (H)	下位群 (L)	上位群 (H)
N	29	28	18	23	15	14
M	22.17	39.11	20.72	35.35	22.47	33.71
SD	2.73	2.87	3.68	2.50	2.83	3.01
Range	16-25	36-48	12-25	32-40	16-25	31-39
t	22.60		14.78		8.56	
P	p < 0.001		p < 0.001		p < 0.001	

(2) 支持政党の分布状況

Table 4 支持政党分布状況 (%)

	EM	TE	EF	T	
N	112	84	50	246	
自由民主党	8.9	9.5	4.0	8.1	
民主社会党	17.0	13.1	2.0	12.6	
社会党	21.4	20.2	12.0	19.1	
共産党	0.9	0.0	0.0	0.4	
その他 (支持政党なし, 無記等)	51.8	57.1	82.0	59.7	
χ ² 検定	0.90 > p > 0.80		0.05 > p > 0.02		p < .01
	p < 0.01				

Table 4 は各グループごとの支持政党の分布状況である。この結果についても筆者は一見して驚いた。「無記」反応は全体の2.9%に過ぎず、「絶対民主主義党」、「無所属」、「民社党と社会党との中間」といつた特殊反応は2%そこそこで、どのグループも50%以上が「支持するものなし」に反応している。女子学生にいたっては実に82%がそれである。総体的に見ても、自由党支持は8%、民社党支持は13%弱、社会党支持も19%といつた驚くべき低率である。統計数理研究所(6)が1959年6月に発表した「国民性の研究」によれば、20才台では自民党支持が34%、社会党支持が38%、支持政党なしが20%となつている。18~9才の大学生であればおそらく、社会党支持が圧倒的になるのではないかと期待されたのであつた。特に調査当時は改正安保条約発効直後のこととして、安保改正反対、岸政権打倒の政治闘争が最も激烈を

極めたところであつたからである。本調査の結果はそうした闘争に指導的役割を演じた社会党を学生達が心から支持していたというのではなく、特に安保条約改正をめぐる各政党とも議会政治の本義を忘れ、政治的民主主義を蹂躪したことに對する国民的憤りを表現しているものと解されるべきであろう。

(3) 職業に対する社会的名声点

Table 5 職業に対する社会的名声点

	EM	TE	EF	T
N	108	86	52	246
M	5.1725	5.1287	5.2050	5.1640
SD	1.66	1.51	1.41	1.56
tとP	t = 0.72 0.50 > p > 0.40		t = 2.63 p < 0.01	
	t = 1.08 0.30 > p > 0.20			
	理論的平均値...5.00			

本調査で79種もの職業を用いたのは、ひとつには別の研究目的である「職業に対する社会的態度」を大規模に調査する意図に基づくものであり、いまひとつには、被験者に本研究の意図を察知されないようにするためでもあつた。Table 5 に示された総括的な結果をみると、どのグループの平均値も 5.10~5.20 附近にあつて、理論的平均値である 5.0 に非常に近い。そして女子学生の平均値はやや高く、工学部学生のそれはかなり低い。これで見ると、職業に対する社会的名声尺度として、9点尺度を採用したことはきわめて当を得たものと考えられる。

2 第1仮説の検討

さて、第1仮説を検討するために、権威主義点の上下両極群が各政党を支持する状況をまとめて表示すると、Table 6 (イ) のようになる。() 内の数字は%で示したものである。

Table 6 (イ) 権威主義点上下両極群の支持状況

	自民	民社	社会	共産	その他	計
L	3 (4.8)	7 (11.3)	17 (27.4)	1 (1.6)	34 (54.8)	62 (99.9)
H	9 (13.8)	11 (16.9)	7 (10.7)	0 (0.0)	38 (58.5)	65 (99.9)
χ^2	9.182		0.10 > p > 0.05			

前述したように、被験者の平均権威主義点は著しく低く、100点満点に換算して $((x-10) \times \frac{100}{6})$ 31.97 である。しかし上下両極群の平均値間には各グループいずれも統計的有意差があるので、両群間における支持政党の

分布状況を比較してよいことになる。いまこれを χ^2 検定してみると、 $0.10 > p > 0.05$ となり、両極群と支持政党間に有意差はみられない。しかし、両極群間における支持政党率の差の大きいものについて、その差に有意性があるかどうかを調べてみると、

自民党については、C. R. = 1.74, $0.10 > p > 0.05$

社会党については、C. R. = 2.36, $0.025 > p > 0.010$ となり、少なくとも社会党に対する支持状態については「権威主義点の高いものより、権威主義点の低いものの方が、社会党をより多く支持する」ということができる。そして自由民主党は保守主義政党であり、社会党は進歩主義政党であるといえるのであるから、次のようにいなおすことができよう。すなわち、

「権威主義点の高いものより、その低いものの方が、より多く進歩主義政党を支持する。」

なお、民主社会党が昨年秋、社会党から分離独立したが、この政党ははたして進歩主義政党であるか、あるいはまた保守的政党であるか。党主・党員はもちろん進歩主義政党というであろう。今日までの活動ぶりを見てみると、自民・社会両党の中間にあつて、常に中道を歩み、健全な民主政治、議会政党の実現におおいに力を尽くしているように見える。しかしいま一歩深く眺めてみると、全体としては、進歩的というよりむしろ保守的と思われる節々がある。こうしたいまひとつ明確性を欠いている民主社会党の性格が、全被験者の31%の支持を受けることにもなり、上下両極群についてみても、下位群で11%、上位群で17%の支持を受ける結果となつていたのであるまいか。試みに民主社会党を保守的性格をもつたものとして、政党を保守的、進歩的と分けてみた場合、その分布状況は Table 6 (ロ) のようになる。この分

Table 6 (ロ)

	保守的	進歩的	その他	計
L	10(16.1)	18(29.0)	34(54.8)	62(99.9)
H	20(30.8)	7(10.7)	38(58.5)	65(100.0)
χ^2	8.306,		0.02 > p > 0.01	

布状態に χ^2 検定を行なつてみると、 $0.02 > p > 0.01$ となり、両極群間と支持政党間との間に有意な関係のあることを示している。また保守的政党と進歩的政党とに對する上下両極群の支持率の差を検定してみると、前者では、C. R. = 1.96, $p = 0.05$, 後者ではC. R. = 2.59, $p < 0.01$ となり、この結果から次のようにいふことができよう。すなわち、

「権威主義点の高いものは、その低いものより、より多く保守的政党を支持し、また権威主義点の低いもの

は、その高いものより、より多く進歩的政党を支持する。」

しかし考えてみれば、Adornoら⁽⁴⁾の F-scale は事実保守主義を測定する尺度でもあるから、本研究において、権威主義と支持政党との間に有意な関係が認められるとしても、あながち驚くには値しないことであるともいえる。しかしながら、ともかく、本研究における被験者が意外に権威主義点が低いにもかかわらず、権威主義と支持政党との間に一応有意な関係が認められたという事実は注目に値しよう。

3 第2仮説の検討

次に、権威主義と職業に対する社会的名声評価との関係を考察するために、79種の職業の中、いわば権威的職業と考えられる職業16種と、非権威的職業と考えられる

職業15種を選び出し、両職業群に対し、権威主義点の上下両極群の与えた平均社会的名声点を算出し、それら両平均値の差の有意性をt-検定したのである。ちなみに権威的職業として選ばれたものは次のとおりである。

工場主、町村長、ホテルの支配人、国務大臣、銀行・会社の重役、裁判官、船長、外交官、弁護士、教育委員、会社・官庁の課長、県知事、国会議員、大学教授、医師、労働組合の委員長

また、非権威的職業として選ばれたものは次のとおりである。

露天商人、きこり、靴みがき、道路工夫、旅館のコック、寝台車のボーイ、炭やき、日雇労働者、漁師、女給、ちり運搬夫、小作人、行商人、仲仕、炭坑夫
最初に、権威的職業、非権威的職業のそれぞれについて

Table 7 権威的職業に対する社会的名声点の比較

	E M			T E			E F		
	L	H	差	L	H	差	L	H	差
工場主	6.32	6.70	-.38	6.37	7.09	-.72	6.57	6.14	+.43
町村長	6.36	6.46	-.10	6.00	6.83	-.83	6.79	6.64	+.15
ホテルの支配人	5.44	5.54	-.10	5.79	6.17	-.38	6.00	5.93	+.07
国務大臣	6.60	7.43	-.83	7.06	7.74	-.68	7.71	7.36	+.35
銀行・会社重役	6.16	6.90	-.74	6.68	7.43	-.75	7.29	7.07	+.22
裁判官	7.20	7.45	-.25	7.00	7.70	-.70	7.29	6.93	+.36
船長	6.56	6.65	-.09	6.21	6.96	-.75	6.86	6.00	+.86
外交官	7.16	7.32	-.16	7.05	7.83	-.78	7.21	6.79	+.42
弁護士	6.36	6.82	-.46	6.47	7.00	-.53	7.07	6.50	+.57
教育委員	5.44	6.21	-.77	5.74	6.04	-.30	5.93	5.79	+.14
会社・官庁課長	5.88	6.40	-.52	5.89	6.61	-.70	6.36	5.71	+.65
県知事	6.56	7.14	-.58	6.74	7.39	-.65	7.21	6.71	+.50
国会議員	5.48	6.64	-1.16	5.90	6.65	-.75	6.79	6.29	+.50
大学教授	7.32	7.43	-.11	7.00	7.30	-.30	7.57	7.14	+.43
医師	6.60	7.32	-.72	6.74	7.30	-.56	7.14	6.71	+.43
労組委員長	5.32	5.71	-.39	5.74	5.26	+.48	6.21	5.57	+.64

非権威的職業に対する社会的名声点の比較

露天商人	3.80	3.50	+.30	3.16	2.96	+.20	3.36	3.64	-.28
きこり	4.28	3.61	+.67	3.90	3.39	+.51	3.93	4.14	-.21
靴みがき	3.76	2.50	+1.26	2.90	2.35	+.55	2.57	3.14	-.57
道路工夫	4.36	3.61	+.75	4.16	3.26	+.90	3.43	4.07	-.64
旅館コック	4.40	3.82	+.58	4.32	4.43	-.11	3.92	4.36	-.44
寝台車ボーイ	4.80	3.96	+.84	4.53	4.35	+.18	4.50	4.50	.00
炭やき	3.96	3.50	+.46	4.00	3.55	+.45	3.71	3.79	-.08
日雇労働者	3.44	2.86	+.58	3.47	2.78	+.69	3.50	3.36	+.14
漁師	4.56	4.25	+.31	4.32	3.96	+.36	4.29	4.29	.00
女給	3.56	3.36	+.20	3.63	3.30	+.33	3.00	3.29	-.29
ちり運搬夫	3.56	3.36	+.20	3.84	3.30	+.54	3.07	3.50	-.43
小作人	3.92	4.04	-.12	3.58	3.44	+.14	4.14	4.36	-.22
行商人	4.40	3.57	+.83	4.00	3.52	+.48	3.86	3.86	.00
仲仕	4.36	4.19	+.17	4.53	4.04	+.49	4.21	4.43	-.22
炭坑夫	4.60	4.43	+.17	4.42	4.09	+.33	4.14	4.00	+.14

て上下両極群の与えた社会的名声点を比較するために、Table 7 を準備した。本表の各グループにおける差の欄をよく観察してみよう。すると、次の事柄が気付かれて、きわめて奇異な感じにうたれるであろう。

(1) 権威的職業に対する社会的名声点の比較においては、EM Group と TE Group では、権威主義点の上位群がその下位群に比してほとんど全職業に対して、より高い評価をなしている。これに対し、EF Group では全く逆に、権威主義点の下位群がその上位群に比して、全職業に対し、より高い評価をなしている。

(2) 非権威的職業に対する名声評価を比較してみると、EM Group と TE Group では、権威主義点の下位群がその上位群よりも、より高い評価をほとんどの職業に対してなしており、EF Group ではこれとは反対に、権威主義の上位群がその下位群よりも $\frac{2}{3}$ に当たる10種の職業に対して、より高い評価をなしている。

上述した点をさらに端的にとらえるため、16の権威的

Table 8 権威的職業に対する平均社会的名声点の比較

	EM		TE		EF	
	L	H	L	H	L	H
N	25	28	19	23	14	14
M	6.30	6.75	6.40	6.96	6.88	6.46
SD	1.65	1.37	1.33	1.27	1.02	1.12
t	5.63		5.60		4.20	
p	p < 0.001		p < 0.001		p < 0.001	

Table 9 非権威的職業に対する平均社会的名声点の比較

	EM		TE		EF	
	L	H	L	H	L	H
N	25	28	19	23	14	14
M	4.15	3.62	3.92	3.52	3.71	3.92
SD	1.24	1.32	1.31	1.08	1.14	1.37
t	5.80		4.21		1.70	
p	p < 0.001		p < 0.001		0.10 > p > 0.05	

Table 10 EM—EF, TE—EF間の職業に対する社会的名声点の差の有意性

	Group	16 権威的職業の場合			15 非権威的職業の場合		
		差	t	p	差	t	p
L	EM—EF	- .58	6.42	p < 0.001	+ .44	4.20	p < 0.001
	TE—EF	- .48	4.52	p < 0.001	+ .21	2.17	0.05 > p > 0.02
H	EM—EF	+ .29	2.80	0.01 > p > 0.001	- .30	2.62	0.01 > p > 0.001
	TE—FE	+ .50	4.82	p < 0.001	- .40	3.33	p < 0.001

職業および15の非権威的職業に対する各グループの上下両極群の平均社会的名声点を算出し、これを比較検討することとした。Table 8, 9 および10の3表はそのために用意されたものである。

Table 8 においては、EM Group と TE Group では、権威主義の上位群が下位群よりも平均社会的名声点において0.001水準以上の有意差をもつて高いことを明白に示しているし、逆に、EF Group では、権威主義の上位群が下位群よりも、やはり0.001水準以上の有意差を以て、平均社会的名声点において低いことを示している。

Table 9 を見ると、EM Group と TE Group においては、権威主義の上位群は下位群よりも、0.001水準以上の有意差をもつて、社会的名声点が低い。EF Group では、反対に、権威主義の上位群は下位群よりも、社会的名声点が高い。しかし、この場合は、統計的有意差は認められないので、そのように断定することはできない。

しかも、Table 10 にみられるように、権威的職業群の場合には、EM Group, TE Group の権威主義的下位群は EF Group のそれよりも社会的名声点が有意的に低いのに、非権威的職業群の場合には、これに反して前者は後者よりも有意的に高い。

また、これを権威主義の上位群についてみると、権威的職業群の場合には、EM Group と TE Group の上位群は EF Group のそれよりも、社会的名声点が有意的に高く、逆に、非権威的職業群の場合には、前者は後者よりも有意的に低い。

以上論じてきたところを要約すると、次のような結論が一応得られるであろう。すなわち、

男子学生では、権威的職業に対する名声評価において、権威主義の上位群の方が下位群より高く、非権威的職業に対しては、前者は後者より低く評価する。しかし、女子学生では、この関係が逆となり、権威的職業に対して、権威主義の上位群は下位群よりも低く評価し、非権威的職業に対しては、前者は後者よりも高く評価する。ただし、非権威的職業に対する上下両極

群間の評価には統計に有意差は認められない。

この結論は第2仮説とどのような関係になるか。第2仮説に従えば、権威主義的上位群は下位群に比して、権威的職業

をより高く評価し、また非権威的職業に対しては、前者は後者よりもより低く評価するということであるから、この点からいえば、EM GroupとTE Groupすなわち男子学生の調査結果は第2仮説によく一致しているといつてよい。しかし、EF Groupすなわち女子学生の結果は全体的傾向として、この第2仮説と逆の関係を示している。いつたいこれはどのような事情に基づくものであろうか。

さて、権威主義的な人格性特質については、Frenkel-Brunswik, E. (7)やSanford, F. H. (8)が研究しているが、権威に対する権威主義的人格性のもつ態度に限定してみると、「権威を過度に理想化」し、「権威を自己同一視」し、「権威を愛し、権威を尊敬する」。したがってまた「社会の明確な上下の階層的体制を強く要求する」。その反面、こうした「権威に対して無意識的な敵意をもつ」ており（権威に対する愛憎という二重性格）、この「敵意を無力者ないし弱者に向けて発散し、攻撃する」。Allport, C. W. (9)によれば、こうした権威主義的人格性の特徴は、かれの自我(ego)構造の弱さから来ており、意識層と無意識層との間に鋭い分裂があつて、そのため絶えざる不安におののいている。かれは自己を恐れ、人を恐れ、自分の変化や社会の変化を強く恐れているのである。この不安や恐れから逃れるために、かれは常に安定性を、明確性を求めてやまないのである。

Adornoら(1)の考案になるF-scaleはこのような権威に対する態度を測定する尺度でもあるから、この尺度を修正した本研究での権威主義尺度での上位群が下位群よりも、権威的な職業群に対し、より高い評価をし、逆に非権威的な職業群に対して、より低く評価したことはあるいは当然といつてよいかもしれない。この点で、男子学生の結果については、第2仮説が明らかに立証されたということができよう。ところが、女子学生の結果はまさに正反対の現象を示している。これをどう説明すべきであろうか。

先にも述べたように、Perlmutter, H. V. (3)は人間性を本来悪と見なし、人間を常に上下、強弱、善悪に二分する点などにおいて権威主義的人格性構造と基本的に同一であるが、その対人関係において逆の方向をとるところのxenophilic personalityを論じており、その人格性特徴を次のように述べている。すなわち、かれは、弱者や少数者と強く自己同一視し、苦しんでいるもの、従属者、特権なき者、偏見の対象となつているもの、経済的に恵まれていないものなどに深い関心をもち、同情する。そしてかれは権力や特権者を強く嫌悪し、攻撃する。

Perlmutter(3)はその研究において、より強いxenophilesはより弱いものよりも、より権威主義的であることを明らかにしている。かれのthe xenophilic personality theoryと前にも一言触れておいたSherif(4)のthe reference group theoryとを併せ考えると、xenophilesにとつては、非権威的な存在はひとつのreference groupとなつてくる。つまりa psychological in-groupとなり、権威的な存在はan authority out-groupとなる。この考え方を本研究における女子学生の奇異に感じられる結果に適用すれば、一応明解な解答が得られるように思われる。すなわち、女子学生において高い権威主義点をとつたものは、実は強いxenophilesであつた。そこで、xenophilesとしての彼女等は権威的職業群に対して低い評価を与えたのである。また非権威的職業群に対しては、彼女らは高い点を与えたのである。しかし、Perlmutter(3)も高いxenophilesすなわち高いauthoritariansとはいえないといつているように、女子学生の権威主義点の上位群がすべて高いxenophilesであるとは断言できないし、また女子学生の権威主義点の下位群がすべて低いxenophilesであるとも断言できないであろう。さらには男子学生にはxenophilesは存在しなかつたとももちろん言えないであろう。ただ、職業に対する社会的名声尺度において、女子学生の権威主義点の上位群が男子学生のそれよりも、権威的職業群に対し、より低い評価をしており、また非権威的職業群に対しては前者は後者よりもより高く評価しているという事実からすれば、女子学生の方が男子学生よりも、よりxenophilesの存在率が大きかつたといえよう。また女子学生の間にあつては、やはり、文字どおりの権威主義的人格性構造のものより、xenophilicな人格性構造のものの方がより大きい存在率をもつていたと考えられよう。

さらに、特に女子学生における権威主義点の上下両極群の大きさが小さ過ぎることから、予想に反した結果が出たのではないかと疑われてくる。

なにはともあれ、女子学生の示した結果の説明については、今後の研究によつてさらに実験的に立証され、その妥当性が科学的に検討されなくてはならない。

4 結 論

われわれは熊本大学の男女学生260名について、次の2つの仮説を実験的に研究した。

- 1 権威主義と支持政党との間には有意な関係がある。
- 2 権威主義と職業に対する社会的名声評価との間には、有意な関係がある。

研究の結果から次の結論が見出された。

(1) 本研究の被験者の50%以上が「支持しうる政党なし」と反応したが、権威尺度における下位群は上位群よりも、明らかに社会党をより多く支持した。また、民主社会党を保守的、共産党を進歩的とみなした場合には、上位群は保守的政党を、下位群は進歩的政党をより多く有意的に支持した。かくて、第1仮説は確認された。

(2) 第2仮説は男子学生において立証された。すなわち、かれらの実験結果では、権威主義点の上位群は権威的職業群により高い名声評価をし、非権威的職業群にはより低い評価をした。下位群はその逆であつた。

(3) 女子学生の結果は第2仮説と反対であつた。すなわち、権威主義点の上位群は権威的職業群により低い評価をし、非権威的職業群に対しては、明確な有意差は認められなかつたが、より高い評価をした。

これはひとつには、上下両極群の被験者数が少ないということに原因するのかもしれない。しかしまた、女子学生には、男子学生よりもいわゆるxenophilesが多く存在し、女子学生の間においても強いxenophilicな傾向をもつたものが多く存在したことによるのかもしれない。これらの点については、今後の実験的研究によつてさらに追究されねばならない。いずれにしても、本研究の結果から、人格性構造の特質と社会的態度との間に相互関係が存在することは一応明瞭に実証されたといつてよいであろう。

文 献

- (1) Adorno, T. W.; Frenkel-Brunswik, E.; Levinson, D. J., & Sanford, R. N.: *The Authoritarian Personality*. New York: Harper, 1950.
- (2) Levinson, D. J., & Huffman, P. E.: Traditional family ideology and its relation to personality. *J. Pers.*, 1955, 23, 251—273.
- (3) Perlmutter, H. V.: Some characteristics of the xenophilic personality. *J. Psychol.*, 1954, 38, 291—300.
- (4) Sherif, M., & Sherif, C. W.: *Groups in harmony and tensions*. New York: Harper, 1953.
- (5) Diab, L. N.: Authoritarianism and prejudice in neareastern students attending american universities. *J. soc. Psychol.*, 1959, 50, 175—187.
- (6) 統計数理研究所：国民性の研究，第Ⅱ次調査 1959.
- (7) Frenkel-Brunswik, E., & Sanford, R. N.: Some personality correlates of anti-Semitism. *J. Psychol.*, 1945, 20, 271—291.
- (8) Sanford, F. H.: *Authoritarianism and Leadership*. Philadelphia: Stephanson, 1950.
- (9) Allport, C. W.: *The Nature of Prejudice*. Cambridge: Addison-Wesley, 1954.

(1960年9月10日原稿受付)